PRO MUSICA NIPPONIA

日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA

創立35周年記念

第155回定期演奏会

春の総合定期演奏会
The 155th Regular Concert

1999年5月27日[木]午後7時開演 津田ホール

■主催
日本音楽集団
〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1滝沢ビル302
TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページ URL http://www.bekkoame.ne.jp/ro/promusica
E-Mail promusica@ro.bekkoame.ne.jp

■助成
文化庁・日本芸術文化振興会
舞台芸術振興事業 Arts Plan 21 芸術文化振興基金

プログラム

一、Krótka Noc　短夜（みじかよ）（1996年）ヴォジミエシュ・コトニスキー作曲
Włodzimierz Kotoński : Mijika-yo

［笛］西川浩平　［尺八］Ⅰ米澤浩　Ⅱ添川浩史
［三味線］山崎千鶴子　［琵琶］田原順子
［二十絃箏］Ⅰ宮越圭子　Ⅱ熊沢栄利子　［十七絃］桜井智永
［打楽器］尾崎太一・立枝恵子
［指揮］田村文生

二、呼応（1964年）杵屋正邦作曲
Seihou Kineya : Ko-ō

［三味線］簑田司郎・杵屋弥佶（客演）

三、四拍子協奏（委嘱・初演）肥後一郎作曲
Ichiro Higo : Concerto for 'Sibyosi'

［笛］西川浩平　［小鼓］尾崎太一　［大鼓］望月太喜之丞　［太鼓］仙堂新太郎
［箏］Ⅰ熊沢栄利子・早川智子　Ⅱ桜井智永・黒澤有美
［二十絃箏］Ⅰ山田明美・久本桂子　Ⅱ嶋崎光代・田村法子
［十七絃］Ⅰ宮越圭子　Ⅱ大畠菜穂子・徳野礼子
［指揮］田村拓男

－休憩－

四、霜夜の砧（1980年）柴田南雄作曲
Minao Shibata : Shimoyo-no-kinuta

［尺八独奏］三橋貴風

五、邦楽器のためのシャコンヌ（1971年）安達元彦作曲
Motohiko Adachi : Chaconne for Japanese traditional instruments

［笛・能管］西川浩平
［篳篥］西原祐二
［尺八］Ⅰ加藤秀和　Ⅱ添川浩史　Ⅲ米澤浩
［胡弓］吉沢昌江（助演）
［長唄・低音三味線］杵家七三　［義太夫三味線］工藤哲子
［琵琶］田原順子
［箏］桜井智永　［二十絃箏］山田明美　［十七絃・地唄三味線］宮越圭子
［打楽器］Ⅰ仙堂新太郎　Ⅱ望月太喜之丞　Ⅲ立枝恵子　Ⅳ細谷一郎（助演）
［指揮］田村拓男

「短夜」ヴォジミェシュ・コトニスキー作曲

「ノクターン（夜想曲）のような曲」とこの作品について表現している作曲者コトニスキー氏によれば、「日本の伝統音楽的な音階等は使用していないながらも、音色のある特殊な部分から、日本的なものが醸し出されている」ということである。確かに箏の調絃等のシステムの面で、例えばペンタトニック的な設定はされておらず、どちらかと言えば半音階的である。また、その他の楽器についても、例えば篠笛と尺八による微分音的ハーモニーなど、非常に特異な雰囲気を持つ部分がある。しかし彼は楽器の音色を構成する要素の中の「喧音」と呼ばれる部分に日本的なものを感じているようであり、加えて、イベントとしての個々の音が放たれるタイミングや、合奏とソロイスティックな部分の連鎖によって成り立っている形式も、この作品が日本的に響く要因の一つだと言える。（第143回定期演奏会初演　1996年7月10日バリオホール）　（田村文生）

ヴォジミェシュ・コトニスキー
1925年ポーランド生。ワルシャワの高等音学院を卒業後、ダルムシュタットやパリを訪れ現代音楽を学ぶ。その後ケルン、ストックホルム、西ベルリンに滞在して実績を積み、現在はワルシャワの高等音楽院で作曲及び電子音楽を教えている。

「呼応」杵屋正邦作曲

作曲者は当初演奏家としても作曲家としても活躍していたが、この作品は作曲活動にのみ専念していた時期の作品である。同じ調絃による長唄三味線のための二重奏曲で、清掻（交互演奏）の手法を取り入れている。このため追いつ追われつ終始緊迫感をともなって演奏される。

杵屋正邦さんの曲の中でも、『去来』や『太鼓の曲』等は、今まで何回も演奏しましたが、この曲は、今回初めてのチャレンジです。三絃Ⅰの表間の演奏は、さほどの難易度ではないのですが、三絃Ⅱで裏間をここまで徹底的に入れるのは、不可能と思えるほどむずかしく、ⅠとⅡの呼吸を合わせるのも、かなりの経験値が必要です。久々に驚かされた曲です。　（簑田司郎）

杵屋正邦
1914年東京生ー1996。長唄三味線を初世杵屋正四郎に、作曲を乗松明広に学ぶ。楽器や題材を自由に駆使し、邦楽出身作曲家としての可能性を追及。合奏曲『野鳥三態』、三絃独奏曲『去来』など幅広い作曲活動をする。芸能選奨文部大臣賞の受賞など、数多く受賞。

「四拍子協奏」肥後一郎作曲

伝統音楽を照射する光源は室町期に有る。光源とは澎湃として湧き上がった世俗音楽の輝きのことである。不思議なこととしか言いようがないのだが、形而上的な思考操作を可能とする言語体系さえ整っていなかったこの時代に、瘧慄が出るような抽象性の漲る演劇が成立した。能楽のことである。能楽に用いられる四つの楽器、四拍子（能管、小鼓、大鼓、太鼓）を能舞台という特殊な栖から拉致し、異質の野に放牧してみたいという念願がかなった。四拍子は箏群とのありきたりな協奏を夢見ない。箏群は四拍子の伴奏を担当しない。両者は室町期に放ち始めたその輝きを、艶かしい仕草を、ことさらに誇りながら互いに拮抗して音楽する。　（肥後一郎）

四拍子協奏＝主役
私達打楽器奏者は長年一つの夢を持ちつづけておりました。何時か主役に……
日本音楽集団は三十五年間に二百に余る新曲を発表して来ましたが、合奏曲に於て打楽器は常に脇役でしかありませんでした。
皆様の中には「打楽器は何時も大きな音を出して目立っているのに何んで？」と思われる方もいらっしゃるでしょう。私達のヒガミかもしれませんが、やはり脇役だと感じてしまいます。今回、作曲の肥後一郎氏との幸運な出会いに恵まれ、念願の打楽器コンチェルトを得る事が出来ました。久方振りに体中に気が満ちて来る思いです。張切り過ぎて「四拍子協奏」が「四拍子競争」に成らぬ様に心がけつつ……　今日は私達が主役です。　（尾崎太一）

肥後一郎
1940年東京生。1962年、早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。ケインズ経済学を専攻。その間、作曲理論を独学。

「霜夜の砧」長管尺八のために　柴田南雄作曲

この曲は「三橋貴風　第一回尺八リサイタル」の為の初の個人委嘱作品として故柴田南雄氏により作曲されました。
以下は作者御自身の言葉となります。
「中国の故事については、秋から冬にかけての乾燥した大気が、夜の静寂の中では砧の音を遥かの彼方にまで運ぶという事実が一種のテレパシーに置きかえられていると思うので、わたくしの曲も、現に演奏されている会場の中だけでなく、過去の、未来の、遠い所の人の耳に達することを願う気持で、この砧という言葉を選びました。また霜夜は現実に冬の寒気厳しい夜であり、同時にそれは人生の冬の、しかも春がめぐって来るのではない、最後の冬の厳しさをあらわしています。」
作曲された1980年に、日本の現代音楽界に於いて作者にとり無二の盟友であった入野義朗氏が亡くなられました。この作品は当時の柴田南雄氏からの心を込めたレクイエムであった様な気がしてなりません。（三橋貴風）

柴田南雄
1916年東京生ー1996 。西洋音楽史演習の時代、無調の時代などを経て、73年にシアターピース『追分節考』を発表する。第22回尾高賞、第13回サントリー音楽賞受賞など、数多く受賞。著書には『西洋音楽史４　印象派以後』『音楽の骸骨のはなし』ほか多数。

「邦楽器のためのシャコンヌ」安達元彦作曲

雅楽の楽器、篳篥に先導されて各楽器が少しずつ変形しながら力強く反復される第一部分。地鳴りのように引き継がれている打楽器の上に古典的な手法で奏される尺八と三味線の掛合いの第二部分。そして堰を切ったように炸裂する打楽器の競演。やがてそれらが次第に終息し篳篥で締め括られる。

この作品は、第18回定期演奏会（1973年１月24日）で演奏されてから、24回定期、52回定期……と今回の定期演奏会で７回目の定期での演奏となる。1971年の放送初演以来、28年の歳月が流れているにもかかわらず、いまだに衰えることのない斬新な魅力を放ち続けている。本来邦楽器が持っていると考えられていた伝統的な特性や響きではなく、その奥に根源的に内包されている野放図で荒々しくかつ切ない響きを曝け出し、今も私たちに新鮮な感動と驚きを与えてくれる傑作といえるだろう。

尚、今回の再演にあたり作曲者の安達元彦氏から次のようなメッセージをいただきましたので、ご紹介します。

「田村拓男様

Chaconne、何時も演奏していただいていますこと、有難いことです。もう、あれは、　ぼくの手はとっくに離れております。皆様とお客さんの間で転がされ、育てられ変っていくことこそ「彼」の幸せです。どうぞ、存分に、御随意に斬新な工夫を加えてくださいますよう。お礼方々……

´９９・４・７　　安達元彦拝」

安達元彦

1940年大阪生。59年末～62年松平頼暁にミュージック・セリエルの諸技法を学ぶ。ポスト・ウェーベルンやペンデレツキの影響を受けた後、68年作曲の『Air』より作風が変化し、歌謡曲や義太夫、地唄・箏曲、アジア、アフリカの民族音楽などに強い関心を示すようになる。『邦楽器のためのシャコンヌ』で芸術祭優秀賞受賞。

出演者プロフィール

杵屋弥佶ー三味線・客演

長唄杵弥会三代目家元。長唄三味線方。長唄三味線を杵屋五三吉に師事。東京芸術大学音楽学部邦楽科を卒業後、

長唄東音会研修所を経て同人となる。

現在東京、福岡を中心に演奏会、舞踊会、歌舞伎公演、放送などで活動中。

田村文生ー指揮

東京芸術大学大学院およびギルドホール音楽院大学院修了。これまでに作品が東京の夏音楽祭等で演奏されたほか、Vallentino Bucchi作曲コンクール等に入賞。

今年４月、日本音楽集団には指揮者として入団。

「今回、集団の演奏会に初めて出演させていただくことになり、今まで西洋音楽に多く係わってきた私にとって、日本の楽器の柔軟性や音色の可能性を再認識し、新しい響きを発見する絶好の機会になると確信します。また、できるだけ多くの作曲家にこのアンサンブルの醍醐味を認識してもらい、作品を提供してもらうことに協力できればと願っております。」

INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
ims

アイ・エム・エス ●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167-0043 東京都杉並区上荻2-3-4
ゆうでんビル
PHONE.03-3379-2292
FAX.　03-3397-7728

第24次海外公演（アメリカ）報告

田村拓男

日本音楽集団にとって24回目の海外公演となるアメリカ公演（アメリカは6回目）が、今年2月、約2週間にわたって行なわれた。

コロンバス、ニューヨーク、シアトル、パロ・アルト、トーランス、アイオワのアメリカ主要都市6ヵ所での公演が組まれ、スコットランド出身で耳に障害を持つマリンバ奏者エヴェリン・グレニー女史と日本の伝統楽器のオーケストラである日本音楽集団とをドッキングさせ、三木稔が書き下ろす新曲（〈レクイエム99〉～ソロ・マリンバと邦楽器のために）をアメリカで初演するというのが今回の制作者ジョン・アーロン氏のメイン企画であった。

コロンバス公演（2/9）の翌朝には「ザ・コロンバス・ディスパッチ」がさっそく音楽評を載せ、「ザ・ニューヨーク・タイムズ」や「ザ・シアトル・タイムズ」「シアトルポスト・インテリジェンサー」などが音楽評を書いた。その全てを詳しく報告できるスペースがないのが残念だが、各地の新聞評も一部をピックアップしながらアメリカ公演報告をさせて頂く。

今回の**ニューヨーク公演**（2/10）は、リンカーンセンター、アリス・タリー・ホールで行われた。ジュリアード音楽大学のホールとしても名高い。このホールで演奏するのは'88年のアメリカ公演以来二度目。会場には、今回海外初演となる「金雀（ゴールデン・スパロー）」（'91年、集団委嘱作品）の作曲家譚盾氏（Tan Dun）や'94年アデレード（オーストラリア）フェスティバルの芸術監督を勤めたクリストファー・ハント氏の顔も見える。この日は昨年11月定期で委嘱・初演した菅野由弘作曲「遊月記」も海外初演する。ニューヨーク・タイムズ紙は次のようなポール・グリフィス氏の評論を載せた。「5年前にニューヨーク・フィルと共演した日本音楽集団は、水曜の夜、アリス・タリー・ホールで演奏会を開いた。日米間をたびたび往復している日本音楽集団の水曜日の演奏会には喜ばされたり、落胆させられたりした」「三木稔の〈レクイエム99〉の方がよりグレニーの持ち味を発揮することができる作品であった。〈レクイエム99〉では、曲の始めと終りに石の楽器が何かを喚起するように打たれる。これにさそわれるようにグレニーのマリンバがきわめてやわらかな鼓動音から、目を見張る打撃音まで、幅広い表現を可能にする。三木氏が日本音楽集団のために書いたこの作品は、ドビュッシー風の微妙な陰翳がところどころ感じられて、とても美しいものだった」「正しいアプローチと思えたのは、Tan Dun（タン・ドゥン）の〈金雀〉において、音と音のあいだに十分に間がもうけられている点だ。田村拓男は日本音楽集団の指揮者だが、彼の指揮する手が音と音のあいだの間を空間に引き入れ、彫刻されたしじまとしてその空間を満たした」「これよりさらに印象的だったのは、当夜の二曲目の古典作品〈青葉の笛〉である。この作品はバラードで、田原順子が琵琶を弾きながら、威厳に満ちた、しみじみとした表現で歌う。田原順子の琵琶はさまざまな、鮮やかでかつ完

THE NEW YORK TIMES, MONDAY, FEBRUARY 15, 1999

MUSIC REVIEW

Placing Japanese Traditions In a Contemporary Context

By PAUL GRIFFITHS

The ensemble Pro Musica Nipponia swings back and forth: five years ago it played with the New York Philharmonic; on Wednesday night, it gave a concert at Alice Tully Hall, delighting and dismaying.

The obvious analogy is with an old-fashioned (that is, 1960's-style) medieval-music group. There's the same appealing mix of winds, plucked strings and percussion, except that instead of recorders, lutes and tabors, Pro Musica Nipponia features the shakuhachi (end-blown flute), fue (piccolo), biwa (mandolin), koto (dulcimer) and drums.

There's the same virtuosity, if in a contrasting tradition, in which what counts is the delicate inflection and the precise, sudden gesture. There's the same sort of Latinate name and a different kind of exotic attire, with black robes and blue-gray aprons for the men, and lustrous tangerine and chrome-yellow kimonos for the women.

Here, though, the comparison starts to break down, because traditional dress is still a regular part of people's lives in Japan. Pro Musica Nipponia's aspiration is to place traditional music, too, in a modern context: to arrange old songs and melodies for present-day instruments and, most of all, to introduce new compositions nurtured by traditional ways of playing.

These are difficult tasks. Wednesday's concert opened with an arrangement of a traditional piece, "Shinyachiyojishi," that sounded like Vaughan Williams's "Fantasia on Greensleeves": a well-meaning travesty. Worse was to come, in Keiko Abe's "Prism Rhapsody," a soupy marimba concerto featuring Evelyn Glennie. She was given better material by Minoru Miki, Pro Musica Nipponia's founder, in his "Requiem 99," where she could range from very soft throbs to spectacular attacks, beckoned at the start and finish of the piece by the evocative sound of slowly clapped stones.

Mr. Miki's writing for the ensemble was very beautiful, with touches of Debussyesque subtlety, but it seemed a mistake to be treating these instruments as an ensemble at all. Tan Dun had the right idea in his "Golden Sparrow," leaving a lot of space between one sound and the next: space filled with sculptured silence, drawn in the air by the arms of the group's conductor, Takuo Tamura.

Still more impressive was the evening's second traditional item, "Aoba no Fue," a ballad sung in a stately but keenly expressive manner by Junko Tahara, who accompanied herself with a variety of vivid, perfect punctuation marks on her biwa, with occasional extensions of the formal melancholy from Kohei Nishikawa on his fue, bending the note, coloring it and intensifying it in ways that were sadly obscured when a dozen or so instruments played together.

1999年2月16日　アイオワ公演　Hancher Auditorium「レクイエム99」（三木稔作曲）

壁なメリハリの表現を持っている。そこに時折西川浩平の笛が入る。笛の音がたわめられ、色づけられ、また力強く響き渡り、この曲の正調の物悲しさをさらに拡張していく」(抜粋) (訳：坂場順子)

シアトル公演 (2/12)　グレニーは昨年秋、シアトル交響楽団と共演して衝撃的デビューをしており、彼女の再来に期待をかけたと思える聴衆が、新築のベナロヤ・ホール (キャパ：2,500) に2,000名以上集まり、最後は長いスタンディングオベーション…。聴衆たちは、日本音楽集団にも惜しみない評価を与えてくれた。ザ・シアトル・タイムズ紙でメリンダ・バーグリン氏は「グレニーの今回のパートナーはシアトル交響楽団に代わって、東西の伝統文化を魅惑的にブレンドさせる日本音楽集団であった。その夜は、グレニーだけが唯一のスターではなかった。西洋の聴衆にとっては、平素あまり聴くことの出来ない楽器たちだったけれど、その演奏において、すべての演奏家がすばらしかった」と述べた。(抜粋) (訳：多田瑞枝)

パロ・アルト公演 (2/13) のメモリアル・オウディトリアムはスタンフォード大学のホールであり、'94年に続く公演。

トーランス公演 (2/14) では、事前に日本の伝統や楽器についての研究会が持たれ、当日も本番前の1時間レクチャーが行われるほどの熱の入れよう。

アイオワ公演 (2/16) は'94年に続く公演で、今回はハンチャー・オウディトリアムという大ホールで行なわれた。アイオワ大学音楽科の打楽器の学生たちは、グレニーの特別講座に盛上がり、日本音楽集団との共演に大きな関心を寄せていた。

SCENE

THE SEATTLE TIMES SECTION C MONDAY, FEBRUARY 15, 1999

C-8 THE SEATTLE TIMES ARTS & ENTERTAINMENT MONDAY, FEBRUARY 15, 1999

Scottish percussionist gives riveting performance

Music review

EVELYN GLENNIE, percussion soloist with the PRO MUSICA SYMPHONIA at Pro Musica Hall, Pacific Lutheran University, Friday, February 12.

By Melinda Bargreen
Seattle Times music critic

Today Seattle debut (and crash course in percussion) for Scottish virtuoso Evelyn Glennie, who dazzled a packed house at Pro Musica Hall with a program that was some of the most riveting percussion music you'll ever hear.

Glennie, who is deaf in her ears but hears through her body and through "listening" to the music through her hands, performed a wide variety of works, both on traditional percussion instruments and on unusual ones, such as water glasses and considerable amounts of wood.

Glennie was the only star of the evening; all the players are musicians who deserve much more than a mere mention, but Glennie was the reason for the sold-out house. Stepping onto the stage in her stocking feet, she was the epitome of focused energy, and she delivered an intensely emotional program of her physical

日本音楽集団第24次海外公演(アメリカ)

特別ゲスト＝エヴェリン・グレニー(マリンバ)
指揮＝田村拓男

■公演日・場所・プログラム

2月9日　コロンバス
Southern Theater
1、新八千代獅子
／畦地慶司・藤舎呂船・三木稔編曲
2、ソネット／三木稔作曲
米澤浩・添川浩史・加藤秀和
3、華やぎ／三木作曲
二十絃独奏＝山田明美
4、まつり
西川浩平・望月太喜之丞・臼杵美智代
5、プリズム・ラプソディー
～マリンバと日本楽器のための
／安倍圭子作曲・秋岸寛久編曲
マリンバ＝エヴェリン・グレニー
6、去来／杵屋正邦作曲
三味線独奏＝簑田司郎
7、レクイエム99
～ソロ・マリンバと邦楽器のために
／三木作曲
マリンバ独奏＝エヴェリン・グレニー

2月10日　ニューヨーク
Alice Tully Hall
1、新八千代獅子
2、金雀(ゴールデン・スパロー)
(1991年委嘱)
3、プリズム・ラプソディー
／Tan Dun 譚盾作曲(今回、アメリカ初演)
4、遊月記 (A Lunar Note) ／菅野由弘作曲
(1998年委嘱・初演)
5、青葉の笛／平家物語より
田原順子・西川浩平
6、レクイエム99

2月12日　シアトル
Benaroya Hall
1、新八千代獅子
2、那須与一／平家物語より
琵琶独奏＝田原
3、プリズム・ラプソディー
4、遊月記／菅野作曲
5、秋の曲／三木作曲　米澤浩・山田明美
6、レクイエム99

2月13日　パロ・アルト
Memorial Auditorium
1、新八千代獅子
2、去来　三味線独奏＝簑田
3、プリズム・ラプソディー
4、遊月記
5、颯踏／長沢勝俊作曲　西川・望月・臼杵
6、レクイエム99

2月14日　トーランス
Marsee Auditorium
1、新八千代獅子
2、文様ー(あや)／三木作曲
山田・早川智子・城ヶ崎美保
3、青葉の笛／平家物語より　田原・西川
4、まつり　西川・望月・臼杵
5、プリズム・ラプソディー
6、秋の曲　米澤・山田
7、レクイエム99

2月16日　アイオワ
Hancher Auditorium
1、新八千代獅子
2、ソネット　米澤・添川・加藤
3、文様ー　山田・早川・城ヶ崎
4、まつり　西川・望月・臼杵
5、プリズム・ラプソディー
6、去来　三味線独奏＝簑田
7、レクイエム99

■参加メンバー
笛：西川浩平
尺八：米澤　浩・添川浩史・加藤秀和
三味線：簑田司郎
琵琶：田原順子
二十絃箏：山田明美・早川智子
十七絃：城ヶ崎美保
打楽器：望月太喜之丞・臼杵美智代
指揮：田村拓男
ゲスト：エヴェリン・グレニー(マリンバ)
作曲家：三木稔
スタッフ：古川尚人、尾崎浩之

■助　成
国際交流基金日米センター
(財)東京都歴史文化財団
(財)三菱信託芸術文化財団

日本音楽集団

名誉代表　長沢　勝俊
代表　田村　拓男
副代表　尾崎　太一
運営委員長　米澤　浩

名誉団員　山田美喜子
坂井　敏子
白根きぬ子

団員連名

〈幹部団員〉
宮田耕八朗（尺八）
三橋　貴風（尺八）
尾崎　太一（打楽器）
西川　啓光（打楽器）休団中
田村　拓男（指揮・打楽器）
長沢　勝俊（作曲）

〈正団員〉
西川　浩平（笛）
西原　貴子（笛）
越智　成人（笛）
西原　祐二（篳篥・笙）
藤崎　重康（尺八・笛）
竹井　誠（尺八）
★米澤　浩（尺八）
水川　寿也（尺八）
★添川　浩史（尺八）
畦地　慶司（胡弓・作曲）
杵家　七三（三味線）
★簑田　司郎（三味線）
田中悠美子（三味線）
工藤　哲子（三味線）
坂口　美香（三味線）
在原富士江（三味線）
山崎千鶴子（三味線）
田原　順子（琵琶）
山田まゆ美（琵琶）休団中
吉村　七重（箏）
★宮越　圭子（箏）
熊沢栄利子（箏）
大畠菜穂子（箏）
桜井　智永（箏）
山田　明美（箏）
島崎　春美（箏）
久東　寿子（箏）休団中
佐藤　里美（箏）
梅澤　一美（箏）
城ケ崎美保（箏）
高橋はるな（箏）
高橋　明邦（打楽器・指揮）
黒坂　昇（打楽器）
★仙堂新太郎（打楽器）
★望月太喜之丞（打楽器）
臼杵美智代（打楽器）
立枝　恵子（打楽器）
杉浦　邦雄（打楽器）
稲田　康（指揮）
三木　稔（作曲）
★秋岸　寛久（作曲）
中島　隆（楽器・舞台）

〈準団員〉
加藤　秀和（尺八）
多々良香保里（胡弓）
中山さち子（三味線）
荒井　靖貴（琵琶）
落合　和美（琵琶）
中垣　雅葉（箏）
桐岡　知代（箏）
嶋崎　光代（箏）
早川　智子（箏）
前川美保子（箏）
丸岡　映美（箏）
田村　法子（箏）
黒澤　有美（箏）
徳野　礼子（箏）
久本　桂子（箏）
田村　文生（指揮）
佐藤　容子（作曲）

協力団員　伊藤　惣一
地方在住団員　田嶋恵美子

事務局　霜島　素子
益井　紀恵

監事　芹沢　英雄

一九九九年五月一日現在

★印＝本年度運営委員

〈団　友〉
青木　誠
秋浜　悟史
荒谷　俊治
稲垣　隆史
大窪　悦子
小田切清光
川崎絵都夫
川崎　祥悦
菊地　悌子
楠　知子
鞍掛　昭二
鯉沼　廣行
坂田　進一
佐藤　敏直
芝　祐靖
清水　義矩
杉浦　弘和
砂崎　知子
芹沢　英雄
高野　文子
田嶋　直士
田中　利光
鶴野　和子
藤舎　呂悦
藤舎　呂船
仲俣申喜男
半田　淳子
廣瀬　量平
福田　輝久
鳳声　晴由
星　旭
増田　睦実
宮本　幸子
望月　太八
元橋　康男
矢崎　明子
柳家小三治
横山　勝也
吉沢　昌江
ディヴィッド・ロープ
ディヴィッド・ヒューズ
ヘンリー・バーネット
ラニィ・シェルダン
王　燕樵
張　暁輝

〈日本音楽集団地方支部〉

道東支部　谷藤　彌
〒　TEL
竹馬　亘　〒　TEL
水戸支部　斎藤幸山　〒　TEL
山梨支部　郷　晃　〒　TEL
長野支部　佐藤幸宇山　〒　TEL
新潟支部　飯吉正山　〒　TEL
愛知支部　山田孝子　〒　TEL
愛媛支部　渡辺治子　〒　TEL
福岡支部　安武由香理　〒　TEL
熊本支部　古川安春　〒　TEL

日本音楽集団　最近の活動と今後のおもな予定（1998年12月～99年11月）

12月19日（土）　高岡おやこ劇場「ごんぎつね」　富山県高岡文化ホール

1999年

1月 5日（火）　世田谷区新年のつどい　世田谷区民会館

1月10日（日）　西条公演「竹取物語」　西条市総合文化会館

1月26日（火）　第154回定期演奏会～新春の奏で　津田ホール

1月29日（金）　美野里中学校邦楽鑑賞会

2月 6日（土）～19日（金）　第24次海外公演《アメリカ公演》（詳細は本文参照）

3月 7日（日）　岩国公演「竹取物語」　シンフォニア岩国

4月 8日（木）　在韓日本大使館公報文化院リニューアル・オープン記念コンサート

5月16日（日）　群馬県吉岡町公演「竹取物語」　吉岡町文化センター

5月27日（木）　日本音楽集団第155回定期演奏会～春の総合定期　津田ホール

6月26日（土）　富山公演「竹取物語」　富山能楽堂

7月10日（土）　日本最古のファンタジー「竹取物語」～それを彩る音たちの世界～
（豊橋市民夏期大学）　豊橋市民文化会館

8月24日（火）　ライオンズ・クラブ合同チャリティ・コンサート　鶴岡市文化会館
（「四季」ダンスコンほか）

9月22日（水）　第156回定期演奏会～アンサンブルの華・二十絃箏のきらめき～
《二十絃箏誕生30年記念特集》　津田ホール

10月31日（日）　国民文化祭・ぎふ99「邦楽の祭典」に出演　岐阜市民会館
（大津絵幻想ほか）

11月 8日（月）　第157回定期演奏会～コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズ～
《池辺晋一郎氏からのメッセージ》

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437